The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 英文和訳における女性語の増訳についての考察 ―The Great GatsbyとThe Age of Innocenceを対象として― |
| Author(s) | 趙, 洋 |
| Citation | 大阪大学, 2020, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/76257 |
| rights | |
| Note | やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。 |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

# 論　文　内　容　の　要　旨

| 氏　名　（　　趙　洋　　） | |
|---|---|
| 論文題名 | 英文和訳における女性語の増訳についての考察<br>—*The Great Gatsby*と*The Age of Innocence*を対象として— |

論文内容の要旨

本論文では、ジェンダーの視点から、英文和訳における女性語が増訳される現象について、定量的分析と実証的分析を行う。「わ」「わよ」「わね」「かしら」「の」「のよ」という6つの代表的な女性用終助詞に絞り、2つの米国文学作品と4つの日本語訳から具体的な発話現場を取り上げ、主要な女性登場人物の発言を分析対象として、女性用終助詞の使用と女性キャラクターの人物像の構築との関連性を論じている。英文和訳における女性語が増訳される現象に裏付けられる言語のイデオロギーとジェンダーのイデオロギーを明確にすることを目的としている。

第1章では、序論として研究背景、「増訳」という翻訳方法の定義、本研究の位置づけ、そして本研究の研究目的という点から述べている。現代日本社会において日本人女性は女性語を使用しない傾向があることに対して、翻訳における外国人女性は頻繁に女性語を使用しているということがよく指摘されている。また、統計したデータを比較してみると、日本語訳に登場する男性人物は典型的な男性語を使用することも衰退傾向を示している。そのため、本研究では、女性人物の発言は女性語が増訳されることに注目する。「明示化」とは、起点テクストの暗示的情報を目標テクストにおいて言葉で明示的に表す方法である。「増訳」とは、字面通り「何かを増加して訳する」と意味し、まだ日本の翻訳学分野において専門用語として定着していないが、女性語のような表現が加えられ翻訳されるという結果に重きを置いている。つまり、「増訳」は、「明示化」より、本来起点言語システムにないものが目標言語に加えられて翻訳される、ということを強調している。本研究では、(1) 日本人女性より訳本において登場する外国人女性の方が頻繁に女性用終助詞を使用するかどうかを明確する、(2) 女性用終助詞の増訳と女性人物像の構築との関係を探究する、(3)女性語が増訳される現象に裏付けられる言語のイデオロギーとジェンダーのイデオロギーを解明する、という3点を明らかにしたい。

第2章では、本論文の理論的な枠組みと女性語に関連する先行研究の実態を述べている。まずはジェンダー研究と言語学分野の重要な専門用語の概念を説明している。理論的な枠組みは、バトラーのジェンダー・パフォマンス理論と中村の構築主義のジェンダー観を基にしている。バトラーは、発話者自分自身は、言語を繰り返す過程に、複数の要素が協働的に働いた結果を踏まえて、変化し流動し多様なジェンダー・アイデンティティを構築している、とジェンダーの構築性を提唱している。さらに、これまでの先行研究を検討した上で、女性語の増訳の効果についての実証的な考察は不十分である、テクストの中に増訳される女性語が日本社会における実際の女性語の使用に影響をもたらすのかどうか、もたらすのであればそれはどのようなものであるか、フィクションに女性語の使用状況について具体的なデータを使って定量的な考察はほとんどない、などの諸問題点を指摘している。

第3章では、研究素材とする英語小説と日本語訳を選択する理由について説明している。また、英語小説と日本語訳に関する詳細な情報を付け加えている。作品の影響力、時代背景、作中人物の社会属性などの要素と研究課題の関連性を踏まえて、英語原本を*The Great Gatsby*と*The Age of Innocence*を決めた。訳本の場合は、主に訳本の流通性、訳者の背景、訳本の出版年代の要因を考慮した上で対象を決定した。

第4章では2つの小説に登場する、本研究で発話者として取り上げている主要な女性キャラクターの人物像を論じている。また、交差性（複合差別）の視点から女性人物の人物像をさらなる分析を行う。出身、年齢、職業、性格、経済階級などの差異により、各人物はそれぞれの人物特徴を持っている。しかし、すべての登場する女性人物は、小説の時代と社会に女性として性差別を受けているということが明らかになった。さらに、原作者は、性差別以外、地域差別、階級差別、夫婦の力関係の差別、エスニシティの差別なども存在していることを示唆している。それは女性語の増訳と深く関わっていると伺える。

第5章では、『女のことばの文化史』という著作を参考にして女性語の発展史を簡潔にまとめている。また、各時代に生産された女ことばの特徴、そして女ことばに裏付けられるイデオロギーを説明している。さらに、現代女性語と本研究で取り上げる女性用終助詞がどのように事典、辞書で定義されているのかを述べている。フィクションにおけ

る女性語の機能を分析する先行研究を簡単に示している。時代の変遷とともに、女性語も様々な形を経て現代の女性語に至った。その中に、女房詞、遊女語、女学生ことばは、鮮明な印象で女性語の歴史に刻印している。様々な女ことばのイデオロギーは違いが些少あるが、「上流・丁寧・魅力的」などの共通な特徴もある、と指摘している。

第6章では、女性語増訳の影響要因を探究するため、量的分析を行う。女性語の増訳に影響を与える要因について、出版年代と言語使用の変化、訳者の性別、訳者の年齢、登場キャラクターの年齢、登場キャラクターの人物像（特に経済階級）、という5つの要素をめぐって仮説を立てた。筆者は、日本語訳から収集したデータを利用し、この仮説が成立するかどうかを判定した。その中で、出版年代と言語使用の変化という仮説が女性語の増訳と関連性を持っていると検証した。これに対して、訳者の性別、訳者の年齢、登場キャラクターの年齢、また、登場キャラクターの人物像（特にキャラクターの経済階級）、という4つの仮説は女性語の増訳との関係について、特に有意義な結果が見られなかった。すなわち、英文和訳における女性用終助詞が増訳されるかどうかということは、出版年代つまり訳本が出版された当時の社会において言語使用の状況と関わっていると言えるが、訳者の性別、年齢、登場キャラクターの年齢、階級などの要素との関連性は薄いと判明した。しかし、丁寧で優雅で品のある女性と無縁である人物は、上流階級の人物より頻繁に女性語を用いることに察知した。ゆえに、筆者は次の章で人物ごとにより詳しい考察を行う。

第7章と第8章では、第6章の結果を踏まえて、バトラーによって提唱されたジェンダーのパフォーマンス理論を応用し、主要な外国人女性の具体的な発話現場に着目し、英語原文と日本語訳を比較して分析している。発話者の人間関係、作中人物の社会属性、発話現場の要素などの方面から、女性登場人物を中心とする発話場面を取り上げて詳細に考察を行う。主張を和らげる、聞き手への配慮を表す、愉快な雰囲気を作るなど、女性語の基本的な機能はよく見られる。また、反論、否定、皮肉など主張度の強い発話場面において、「上流階級」として描き上げられた女性人物の発言も女性語が増訳されている。これにより、女性キャラクターの控えめで優しい人物像を維持できると主張している。対照的に、本来「上流ではない女性」として構築された人物の発言に女性語を増訳するのは、上流階級への願望が表現された。つまり、女性語を使用するグループ（上流社会から受け入れる女性）と同じアイデンティティを形成するため、登場人物の発話文末に女性語が増訳される。女性語の増訳による機能や効果、構築された人物像が異なるが、言語のイデオロギーとジェンダーのイデオロギーは利用されることが判明された。

第9章では、第7章と第8章で行なった考察に基づき、結果をまとめている。

第10章では本研究の全体における考察の結果とともに、今後の研究となる課題を提出している。研究結果として、(1) 日本社会において日本人女性の使用状況に関わらず、日本語訳において外国人女性キャラクターの発言は女性用終助詞が増訳されることが多い、 (2) 女性用終助詞の増訳は、効率的に特定の女性人物像を構築することに作用を発揮している、(3) 「上流階級」の女性像を効率的に構築することができるのは、女性語に裏付けられるイデオロギーが「上品・優雅・女らしさ」などのイメージと結びついているからである、という3点を明確にした。女性語は「言語イデオロギーとジェンダー・イデオロギーが交差する場所」として、日本社会と日本文化、さらに日本人読者の脳裏に潜在しているステレオタイプを喚起する恐れがある。女性語は翻訳作業の過程に再生産され、再利用され、また訳者と読者の言語行為を制約する道具になり、ステレオタイプを強化する可能性がある。女性語のこの「役割」は注目に値すると思われる。また、本研究で言及する女性という対象は、英語を母語とする米国の女性であった。論文の結果を踏まえて、中国人・韓国人などアジア系の女性を対象として、複合差別（交差的な差別）の視点から女性語の増訳について考察を深めることにより、翻訳理論にもジェンダー研究にも新しい視界を広げられることを期待している。

It is widely said that few Japanese women actually use stereotypical “women’s language” in daily life. But the speech of foreign female characters in Japanese translations is commonly translated using this stereotypical language, especially the sentence-ending particles. Hence, this research has been conducted to clarify the effects of adding the stereotypical “women’s language” during the process of translating English novels into Japanese. By exploring the relationship between the stereotypical “women’s language” and the construction of female characters, it seeks to explicate the underlying ideologies of gender and language.

Chapter 1 presents the background and objectives of this study, and the definition of amplification.

Chapter 2 reviews the fundamental and theoretical framework of this dissertation, with reference to Judith Butler’s theory of gender as performance. The concepts of some relevant keywords from the fields of translation studies and gender studies are introduced. An overview of the unanswered questions in present studies of Japanese women’s language is also provided. The lack of research from an empirical and quantitative perspective is also pointed out.

Chapter 3 provides the specific background concerning the two American novels and four Japanese

translations that are analyzed.

Chapter 4 discusses how the personalities of the five main female characters are constructed, and provides a deep analysis of the characters from the perspective of intersectionality.

Chapter 5 summarizes the chronological development of traditional Japanese women's language, clarifying how modern women's language was formed and the different ideologies of different forms of Japanese women's language.

Chapter 6 seeks to explore the factors which may play a role in the amplification of Japanese women's language in translations of American novels. Five hypothetical factors are proposed:, the time period that the Japanese versions were first published, the gender of the translators, the age of the translators, the age of the female characters and the personalities of the female characters in the original novels, with consideration of social class as well. With data collected from the Japanese translations, these factors are then examined to determine how many of these five factors influence the use of stereotypical Japanese women's language in these translations.

Chapter 7 and Chapter 8 present an analysis of five female characters' discourses.

Chapter 9 provides a comparative summary of the analysis presented in Chapter 7 and Chapter 8.

Chapter 10 provides a conclusion of the study. In brief, it is proved that the speech of female characters in these two works of fiction is more frequently translated using traditional Japanese women's language, compared with the speech of Japanese women in modern Japanese society. The author asserts that the dominant relations between gender ideology and language ideology in modern Japanese society are reinforced through traditional women's language.

様式 7

# 論文審査の結果の要旨及び担当者

| 氏　名　（　　趙　洋　　） | | |
|---|---|---|
| 論文審査担当者 | （職） | 氏　　名 |
| 主 査 | 教授 | ジェリー・ヨコタ |
| 副 査 | 教授 | 里内克巳 |
| 副 査 | 准教授 | 村上スミス・アンドリュー |

## 論文審査の結果の要旨

趙洋氏の博士学位申請論文、「英文和訳における女性語の増訳についての考察―*The Great Gatsby*と*The Age of Innocence*を対象として―」では、ジェンダーの視点から、英文和訳における女性語が増訳される現象について、質的分析と量的分析の両方を使って実証的な考察を行っている。6つの代表的な女性用終助詞に絞り、2つの米国文学作品と4つの日本語訳から具体的な発話場面を取り上げ、主要な女性登場人物の発言を分析対象として、女性用終助詞の使用と女性キャラクターの人物像の構築との関連性を論じることにより、英文和訳における女性語が増訳される現象に裏付けられる言語のイデオロギーとジェンダーのイデオロギーを明確にすることを目的としている。

第1章では、序論として研究背景、「増訳」という翻訳方法の定義、本研究の位置づけ、そして本研究の目的という点から述べている。現代日本社会において日本人女性は女性語を使用しない傾向があることに対して、翻訳における外国人女性は頻繁に女性語を使用しているということがよく指摘されている。また、実際の数値を比較してみると、日本語訳に登場する男性人物が典型的な男性語を使用することも衰退傾向を示している。そのため、本研究では女性人物の発言は女性語が増訳されることに注目する。「明示化」とは別に、「増訳」とは、字面通り「何かを増加して訳する」ことを意味し、女性語のような表現が加えられ翻訳されるという結果に重きを置いている。リサーチ・クエスチョンは、(1) 日本人女性より訳本において登場する外国人女性の方が頻繁に女性用終助詞を使用するかどうか、(2) 女性用終助詞の増訳と女性人物像の構築との関係はどのようなものか、(3)女性語が増訳される現象にどのような言語のイデオロギーとジェンダーのイデオロギーが裏付けられているか、という3点になる。

第2章では、理論的な枠組みと女性語に関連する先行研究の実態を述べている。まずはジェンダー研究と言語学分野の重要な専門用語の概念を説明している。理論的な枠組みは、バトラーのジェンダー・パフォマンス理論と中村の構築主義のジェンダー観を基にしている。バトラーは、発話者自身は、言語を繰り返す過程に、複数の要素が協働的に働いた結果を踏まえて、変化し流動し多様なジェンダー・アイデンティティを構築している、とジェンダーの構築性を提唱している。さらに、これまでの先行研究を検討した上で、女性語の増訳の原因と効果についての実証的な考察は不十分であることから、テクストの中に増訳される女性語が日本社会における実際の女性語の使用に影響をもたらすのかどうか、もたらすのであればそれはどのようなものであるか、といった問いを投げかけるとともに、フィクションに女性語の使用状況について具体的なデータを使って定量的な考察はほとんどない、などの問題点を指摘している。

第3章では、研究素材とする英語小説*The Great Gatsby*と*The Age of Innocence*とその日本語訳を選択した理由について説明している。

第4章では、2つの小説に発話者として取り上げている主要な女性キャラクターの人物像を論じている。また、交差性（複合差別）の視点からそのキャラクターの人物像についてさらなる分析を行っている。出身、年齢、職業、性格、経済階級などの差異により、各人物はそれぞれの人物特徴を持っている。しかし、登場する女性人物すべてが、物語の時代に女性として性差別を受けているということが明らかになった。

第5章では、『女のことばの文化史』という著作を参考にして女性語の発展史を簡潔にまとめている。また、各時代に生産された女性のことばの特徴、そしてこの言葉に裏付けられるイデオロギーを説明している。さらに、現代女性語と本研究で取り上げられる女性用終助詞がどのように事典、辞書で定義されているのかを述べている。これまでフィクションにおける女性語の機能を分析する先行研究を簡単に示している。女房詞、遊女語、女学生こと

ばに裏に付けられているイデオロギーには、「上流・丁寧・魅力的」などの共通する特徴もある、と指摘している。

第6章では、女性語増訳の影響要因に関して量的分析を行っている。女性語の増訳に影響を与える要因について、出版年代と言語使用の変化、訳者の性別、訳者の年齢、登場キャラクターの年齢、登場キャラクターの人物像（特に経済階級）、という5つの要素をめぐって仮説を立てている。日本語訳から収集したデータを利用し、この仮説が成立するかどうかを判定した結果、出版年代と言語使用の変化という仮説が女性語の増訳と関連性を持っていると検証した。これに対して、訳者の性別、訳者の年齢、登場キャラクターの年齢、また、登場キャラクターの人物像（特にキャラクターの経済階級）、という4つの仮説は女性語の増訳との関係について、特に有意義な結果が見られないという結果になった。

第7章と第8章では、第6章の結果を踏まえて、バトラーと中村によって提唱されたジェンダーのパフォーマンス理論を応用し、主要な外国人女性の具体的な発話場面に着目し、英語原文と日本語訳を比較して分析している。発話者の人間関係、作中人物の社会属性、発話場面の要素などの方面から、女性登場人物を中心とする発話場面を取り上げて詳細に考察を行っている。主張を和らげる、聞き手への配慮を表す、愉快な雰囲気を作るなど、主流言説によく指摘される女性語の基本的な機能は数多く観察されている。また、反論、否定、皮肉など主張度の強い発話場面において、「上流階級」の典型的な描写に使われる女性人物の発言も女性語が増訳されていることが観察されている。女性語の増訳により、「乱暴」「女らしくない」などの非難と批判を回避し、典型的な控えめで優しい人物像が維持されていることを主張している。対照的に、本来「上流ではない女性」として構築された人物の発言に女性語を増訳するのは、その人物の上流階級への願望を際立たせるための表現上の工夫である、と主張している。女性語の増訳による機能や効果、構築された人物像が異なるが、言語に裏付けられるイデオロギーとジェンダーに裏付けられるイデオロギーが利用されることは共通点として判明された。

第9章では、第7章と第8章で行なった考察に基づき、結果をまとめている。

第10章では本研究の全体における考察の結果とともに、今後の研究となる課題を提出している。研究結果として、(1) 日本社会において日本人女性の使用状況に関わらず、日本語訳において外国人女性キャラクターの発言は女性用終助詞が増訳されることが多いということを明確にした、(2) 女性用終助詞の増訳は、効率的に特定の女性人物像を構築することに積極的な作用を発揮しているということが考察によって明らかになった、(3) 「上流階級」の女性像を効率的に構築することができるのは、女性語に裏付けられるイデオロギーが「上品・優雅・女らしさ」などのイメージと結び付いているからであるという点を検証した、という3点が明らかになった。

女性語は「言語イデオロギーとジェンダー・イデオロギーが交差する場所」として、日本社会と日本文化、さらに日本人読者の脳裏に潜在しているステレオタイプを喚起する恐れがどれほどあるかについては、量的には示せないとしても、本論文では、女性語は翻訳などの過程において再生産され、再利用され、また訳者と読者の言語行為を制約する道具になり、ステレオタイプを強化する可能性があるということを明確にし、注目すべき問題であるという論考に説得力があり、審査員全員は本論文が翻訳理論にもジェンダー研究にも新しい視界を広げていると評価した。登場人物の発話内で使用される女性用終助詞が、読み手による人物像の理解にどのような役割を果たしているのかという問題を考察する際、その解釈の根拠が不明な場合があるものの、全体的には言説理論および文化表象理論についての根本的な理解が示されていて、本論文の学術的な価値を大きく損なうものではないと判断した。

以上のように、博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを終えていることを申し添えます。